

# 佑 啓

社会福祉法人 佑 啓 会 ふる里学会  
〒290-0265 市原市今富 1110-1  
tel 0436-86-7611  
<http://www3.ocn.ne.jp/~fgakusya/>  
mail fgakusya@peach.ocn.ne.jp  
発行者 里 見 吉 英  
編集者 三 股 金 利

## 理想と現実の狭間で

里見 吉英

近くの霊園の桜が目眩しいほど満開の時期もあつという間に過ぎ去り、黄緑鮮やかな葉桜が雨に打たれてなとなくどんよりとした鬱陶気のある季節が訪れた。このような日には決まって昔のことを思い出してしまふ。いまだになせそうという想いかられてしまふのかわからないが。

そんな小雨降る、朝のできごと。洗面所のボウルのなかにはぬれたタオルが転々としている。疑問に思いつながらもう片方の洗面所をのぞいてみるとひとの影が。面白そうなのでしばしば見物することに。

「あー、Rくん、水遊びしちゃだめでしょう」  
「あーい」  
返事は良いのだが両手とはまらない。ニコニコしながらまたも水遊びにこ執心。

「もー、ダメー」  
若い女子職員の少々ヒステリックな声。いたずらをやめない彼を見ながらうなだれている顔に向かい、Rくんからのひと言。

「あーい」  
「ク、ク、ク」  
こらえるつもりが声となり

を知らない未熟な人間ではどうすることもできず、あつちへ迷走、こつちに迷走、ようやくオープンにこぎつけるまで七年余り。入所希望者は、定員六〇名に対して三〇〇名を超えた。落ち着く暇もなく、入所できないのならせめて屋間だけでも、という声を無視することもできず通所部開設。困った時だけでもという声に添えて、ショートステイその他諸々雑多な事業を展開することになった。

施設は永久に生活する場ではないと言いつながら、独自に三年間という期限を設けたが、家族からは「せつかく入ることができたのに、それでは弱者へのいじめではないか」という声に押され、「三年毎に見直していきます」ということでおおかた落ち着いた。そんなこんなしているうちに世の中は地域だ、在宅だと大合唱。施設は権利侵害の巣窟だなどと極端な意見も耳にする。こんな風潮の中で我々現場の人間が「元氣を出して明るく」というかけ声もどこか力が入らない。こうした時流にアンチテーゼを提示したいのだが弱気な側面も見え隠れしてしまう。

個の大切さ、個人の権利は十分に考えているつもりである。しかし一方で集団生活の難しさを身に染みて感じてい

るのも確かだ。だからといって急な方向転換は難しい。本人の選択肢が拡がることは良いことなのだが、そこに至る段階をどのように踏んでいくのか。社会資源の整備なども含め、考えなければいけないことは多くある。理想に向かう前にまずは現実と向き合う必要があるからだ。

幼年期から壮年期という、言わば人生をトータルに考えなければいけない知的障害者福祉の実状は、ひとつの考えに当てはめることはできない。いろんな回答があるはずだ。それに加えて障害の程度や性格、家庭状況、地域の環境なども十分に考慮する必要がある。そのうえで、そのひとらしく生きるためにいまできる最適なことを模索することが大切なのでは。実際に沿ったやり方ではなければ給空事になつてしまふ危険性はおおいにある。

これから脱けだして、しっかりと自己の足場をかためられるひとだけが苦境を糧とできるのだろう。

あまたこうだ言い、自虐的になつていても仕方がない。職員がプライドをもてなければそこで生活する利用者は本当に悲劇だから。空元氣でもいいから「利用者も家族もそして職員もそこそこ楽しく」をモットーに進むしかない。いや進みたい。

時計の針に目をやると午後三時を少しばかり回つていた。  
「あーい」  
聞きなれてきた声のお漏りだ。その声につられるように外に出ると、朝から降つていた雨はすっかりと上がり雲の隙間から陽がさしてきた。薄い逆光を浴びて輝くアスファルトが、少しばかり目に眩しかった。

(施設長)



## 渡辺 晃

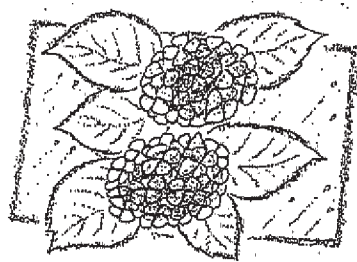
去りにされ、周囲に氣を遣いながら生活をしてゐるのが実態のようである。たゞ子供達と行動を共にしていると感受性が八一倍強く、自己の氣持を純粋に表現しており、一つの物に固執したり教養を通ずなど対応の難しさはあるものの他の健康児と全く変わらないことに気づく。こうしてみると障害は誰でも生れながらにして持つてゐる一つの個性として納得でき、健常者同様個人としての尊厳を認め、より人間的な生活を送りたいと思ふのである。

今、我が國は未曾有の老齡化社会と少子化時代を迎へ福祉をとり巻く環境は大きく変貌しようとしているが、介護制度等々難題が山積しその解決に向け試行錯誤を繰り返している状況下にある。だが、いかんせん衰びく不景氣と混迷を続ける

ところで身体障害者の生きざまを爽やかに書いた「五体不満足」が読者の共感を呼び一躍二武ブームに沸き返るとともに多方面に話題を投げかけた事は記憶に新しい。これを機に障害者に対する世間の認識が幾分変わった気がするがしかし冷静になって考えるとこれは身体障害者のことであって知的障害者には必ずしも通じないものとつくづく感ずるのである。それもそのはず、前者は五体不満足とはいいながらも思考力は正常で専門的知識を備えた者も多く、また開放的であることからバラリンピック等陽のあたる舞台での活躍の場も多い。しかし後者はどうであらうか。最近でこそワークホームで一生懸命働いている子供達の状況がブラウン管を通して見られるようになったが同じ障害者でも大方は閉鎖的なことから表に出る機会も少なく社会の片隅に置き

おわりに「慚みは他人に打ちあけることとで半減し、喜びは他人に伝えることににより倍加する」といわれているが、程度の差こそあれ、同じ条件の下で生活している私達は学舎の発展を念頭に知恵を出し、汗をかきながら意思の疎通を図り、親としての責務を果たしたいと思つてゐる。

(渡辺 裕二 父)



女性職員はハトバスツアー

岡田 有代

働き始めて早一年。学舎の行事として「旅行」というものがいくつかあるが、職員だけ、しかも女性限定（本来は限定ではないのだが何故か男性は来ない）というのは、はとバスツアーだけ。時は三月末、一年の労をねぎらってくれるのかしら、ならば是非と喜んで参加させていだいた。

があり、風呂場からは外の景色が見え、サウナあり、2種類の露天風呂ありと優雅な気持ちにさせてくれた。一般的な感覚では、家の風呂と温泉を比較して、「やっぱり温泉ね!」と感じるのだろうが、仕事柄か、温泉を見る基準が「家」く「学舎」く「温泉」となっています。故に、

もし「温泉」が学舎のお風呂より狭く小さいと密かにシヨックを受ける。毎日学舎のお風呂に入っている寮生さんも同じように感じるのだろうか。寮生さんにはお風呂好きが多いが、ここは広く何種類もあり、のんびり出来るのできつと喜んでくれると思う。一緒に来たいなあなんて思いながら湯に浸かっていた。

つづいてはショッピング。御殿場のアウトレットの店がオープンしたての時、お客さんで道路が渋滞になると聞いたことがあったので、買い物好きの私としては当日の行程を知ったときは密かに胸が

高鳴った。實際行ってみるとかなり広く、全部の店に入り品定めするには時間がなかった。必死の思いでお目当てを探している。ふと生活職員の習性が店内に入り洋服などを見るときいつい養生さんのものを選んでゐる。「これは〇〇さんに似合うだろうな」「〇〇さんならこっちが似合うな」と真剣に考えていた。我に返ると限られた時間で買ったものは亦いずボン１本とツボ押しのお梅一本であつた。

温泉といい、買い物といい、気がつく  
と学舎のこと、寮生さんのことを思い出

波瀾の帰路の中、疲れを感じながらも企画してくれた福利厚生委員の皆さんに感謝していると、ふと大事なことを思い出した。4月から自分が福利厚生委員だった！リフレッシュしたばかりなのに、早くも現実には引き戻された。

そして現在、明るく楽しい職場作りを  
目指し頑張っています。あの日買ったツ  
ボ押しの手紙に助けられながら・・・。

(附錄四)

共同募金受配事業完了のお知らせ

した。  
ここに報告申し上げ、ご協力を賜り  
ました関係各位に謹んで感謝の意を表  
します。

事業名 東西の路開（永）分 八五ノ  
事業費 一三〇五、〇〇〇円  
受配金 八〇〇、〇〇〇円  
発行年月日 平成十三年五月二十二日

## 編集後記

最近の私の悩みはパソコン。使いこなすたてでんがに仕事もはなげいでてな。そつだ、私もツボ押しの特賣おうかしら。。。

高橋 ゆり子